

石井十次 vol.24
顕彰会だより

公益財団法人 石井十次顕彰会



公益財団法人 石井十次顕彰会

第24回を迎えた石井十次賞

青少年福祉に尽力する長谷場氏に



公益財団法人・石井十次顕彰

て入職しました。

会は第24回「石井十次賞」の受賞者を、東京・足立区の社会福祉法人・青少年福祉センター創始者で、現在、専務理事を務める長谷場夏雄（はせば・なつお）氏に決定し、昨年4月10日、高鍋町中央公民館ホールで贈呈式をおこないました（写真は長谷場氏の代理で表彰を受ける同センターの荒船日子常務理事。荒船さんは麻生太郎・元内閣総理大臣の実妹）

長谷場氏は鹿児島県の出身。父の仕事の関係で満州に渡り、

当地で終戦を迎えたものの、日本へ引き揚げる前に両親と死別し、弟を連れて帰国。縁あって東京の児童養護施設・東京サレジオ学園に入所者の指導員とし

ところが、養護施設出身者は、社会に出ると行き場ないことを知ります。そこで昭和33年、手元にあつた二万円を資金に四畳半

一間のアパートを借りて養護施設出身者たちと共同生活を開始。その6年後には現在の自立援助ホームの原型となる5階建てのアフターケアセンターを、さらに昭和46年には高等職業訓練校を開設するなどして380名を超え、若者を社会に送り出し、現在も100名近くの入所者が共同生活を営んでいます。

石井十次顕彰会は、国に先駆けた60年近くに及ぶ一連の活動と今なお「子どもたちに夢をもたせて育て上げる」という情熱を抱き続けておられる点を高く



評価し、贈呈を決定しました。

当日は河野俊嗣・宮崎県知事（出席は代理）をはじめ、高鍋町の姉妹都市である山形県・米沢市の安部三十郎市長（出席は代理）ら、多数の来賓が出席。荒船常務理事が謝辞を述べると、会場からは盛んに拍手が送られました。



審査経過を報告する福島雄選考委員長



荒船常務理事



長谷場夏雄・専務理事

はせば・なつお 昭和4年、鹿児島県生まれ。戦後、満州から引き揚げ後、東京サレジオ学園で指導員として働く傍ら神学校に入学。大阪星光学院で英語教師を務めた。現在、自立援助ホーム3カ所、児童養護施設2カ所、知的障がい者のためのグループホーム1カ所を法人として運営。

児童の自立を支援する 日本での先駆的な施設

足立区扇の住宅街の一角に建つ青少年福祉センター。敷地内には、かつて施設が新宿にあつたことにちなんで名付けられた自立援助ホーム「長谷場新宿寮」と、全国で唯一、中学・高校生の高齢児のための児童養護施設「暁星学園」、児童養護施設などを退所し就職をめざす青少年に生活指導・支援をおこなう「おうぎ寮」、362名の卒業を送り出した高等職業訓練校（現在は閉校）の建物などがあります。

ほかに同じ足立区内に女子を対象にした自立援助ホーム「清周寮」、知的障がい者のためのグループホーム「ノエル」、新宿区に高齢児童養護施設「あけの星学園」があり、合計100名近くが共同生活を送ります。

また、当センター出身者のカナダへの移住にも積極的に取り組み、現在も30名が幸せに暮らしているといえます。

なお、設立当初は「アフターケアセンター・憩いの家」という名称でした。アフターケアとは当時、特効薬処方後のケアを「アフターケア」と呼んでいたことに由来します。いずれにしても日本での児童援助施設の歴史をひもとくと必ず先駆者として長谷場氏の名前が出てきます。それほど、この道への功績は大きいといえるでしょう。



正面に見えるのが長谷場新宿寮。写真下は暁星学園内の部屋や共用スペース



石井十次賞

社会福祉法人 青少年福祉センター

専務理事 長谷場 夏雄 様

孤児救済を自らの天職と定め 五十年の生涯を捧げた児童福祉事業の先駆者 石井十次の人類愛と社会奉仕の崇高な精神を永遠に継承し 愛の心 思いやりの心を 全国に広めるため石井十次賞を制定しました

貴殿は 国に制度がなかった時代 行き場を失った養護施設退所児童を救うため 一九五八年 子ども達と共に四畳半の小さなアフターケアセンターを設立 それを原点とし 幾多の困難を乗り越え 財団法人青少年福祉センター設立 海外移住の推進 高等職業訓練校開設 児童養護施設行政暁星学園設立など 児童救済事業や児童福祉研究活動を実践 その志は ついには国をも動かし 児童福祉に自立生活援助事業の重要性を知らしめ 自立援助ホーム制度を創設 数多くの子ども達を救済し社会に送り出してこられました

このことは正に石井十次の理念に沿った偉業であり心から敬意を表しここに第二十四回石井十次賞を贈りその功績を讃えます

平成二十七年四月十日

公益財団法人 石井十次顕彰会

理事長 黒木 敏之

▶表彰状全文

社会福祉法人 青少年福祉センター
東京都足立区扇1-12-20
☎03(3856)2728

石井十次生誕記念式典で小・中・高校生が発表

十次からの学び、しっかり生かす



「石井十次賞」贈呈式に続き、「石井十次生誕記念式典」を高鍋町中央公民館ホールで開催しました。昨年で第33回目を迎えた式典では町内の小中高校生5人が、石井十次への思いなどを作文にまとめて発表。そのうち2人は、十次から学んだことを英語スピーチで表現しました。

高鍋東小学校5年の黒木李桜さんは、ボランティア活動を通じて「人のために尽くす」ことを学んだと発表。高鍋西中学2年の杉羽玖美さんは、自己中心的な考えや行動を戒め、夢が叶わなくても十次のように強い信念で乗り越えたいと述べました。高鍋高校2年の友草はるのさんは、十次が遺した言葉を引用しながら自分の目指す未来を信じ、努力していきたいと締めくくりました。

英語スピーチでは高鍋東中学3年の竹内一偉さんが十次のエピソードとして有名な「なわの帯」を紹介し、「信・愛・和」をいつも心にとめたいと発表。高鍋西中学校3年の大庭七星さんは、十次が満足に食べることもできない男の子を預かったことをきっかけに施設を設立したエピソードを披露し、日本での福祉の道を開いた先駆者・十次は郷土の誇りだと述べました。



▶ 式典では「石井十次小伝」や「石井十次英語物語」を顕彰会の原重喜副理事長が小学生に贈呈



孤児の父、石井十次

高鍋東小学校 5年 黒木 李桜



私は4年生の社会やめいりんタイムなどの学校の授業で、石井十次先生のことを学習しました。私は、石井十次先生は人のために命をささげた、思いやりのある人だと思います。それから石井十次先生に少しづつきょうみをいただくようになりました。

私は石井十次先生の生き方から教えられたことが大きく二つあります。一つは明倫の教えである「仁」、つまり「思いやりの心」です。私はたまに、こまっっている人がいても助けられないことがあります。それは勇気が出せずに、声をかけられなかったからです。ですから、「なわの帯」の話で友達を助けたり、岡山で孤児院を開いて、生がいでたくさんの孤児を救ったりした石井十次先生を尊敬しています。もう一つは「人のためにつくす」ということです。私はこれまでに、ボランティアで蚊口の海岸の清掃活動をしたことがあります。海岸には木の枝や花火のごみなどがあり、き

れいとは言えない状態でした。清掃に参加した後は、海岸はともきれいになりました。

それを見て、私はいいことをしたなと晴れやかな気持ちになりました。きつと蚊口の海にきた人は喜んでくれたと思います。小さなことでも、人のためにつくすということは、気持ちがいいことだということが分かりました。

このように、私は石井十次先生から「思いやりの心」、「人のためにつくす」という大切なことを学びました。これからは石井十次先生に近づけるように、誰にでも優しくせつしたり、みんなのためになることを進んでしたりしてがんばっていききたいと思います。

みなさんも、ふるさと高鍋町を今まで以上に大切に、少しでも多くの人に石井十次先生の心を広げていきましょう。

石井十次先生から受け継ぐ思い

高鍋西中学校 2年 杉 羽玖美



石井十次次先生は、みなさんもお存知の通り、この高鍋町出身の偉大なる先人の一人です。そして私たちは今の時代をこの高鍋町で過ごしています。小学校では、毎年のように十次先生について学んできました。その十次先生の姿は、決して裕福ではありません。しかし、多くの子供たちと生活を共にするたく

ましさは、私の心に強く残りました。けれども、そのたくましさの裏側には想像を超える苦勞や悲しみがあつたに違いありません。その壁を乗り越えた十次先生が私たちに教えてくれたこと、それを私たちは心に残していかなければいけないと思います。人は、誰でも一度や二度「自分さえ良ければ」と思ったことがあると思います。街を歩いていてゴミを持ち帰りたくないから道に捨てる。

意見発表

(前ページより続く)

待ち合わせがあるのに少しでも寝ていたいから時間に遅れる。忘れ物をして先生に怒られたくないから黙っておく。これらのことは、いけないと分かっているけど、ついついしてしまうことだと思います。これはすべて自分のことしか考えていないからだと思います。「自分がこうしたいから。自分に都合が良いから。」と、すべてが自己中心的な考えです。十次先生から学んだことは「人のために生きる姿」です。私も以前、少し悩みがあったときに、周りのことまで考えることができずに友人を巻き込んで辛い思いをさせてしまったことがあります。自分の気持ちを第一に考えることは大事だと思います。しかし、他人を困らせないように自分の気持ちをコントロールすることも大事だと思います。今の豊かな現代社会では、自己中心的な行動や、考えを持つてしまいがちです。生活は豊かにもかかわらず、人の心は思いやりが欠け「他の人のために」という気持ちにはなかなかならず、心の豊かさに欠けていると思います。

十次先生は、自分の夢を孤児救済のために諦めました。私は先日、「立志式」で、自分の将来について、大勢の人たちの前で発表しました。今まで、なんとなくぼやけていた夢が、今まで氏に感銘を受け、日本初の児童福祉に携わり始めました。その際、もう後には引き返せないという決意の表れなのか、六年間にわたり学び続けてきた医学の本やノートを焼き払っています。様々な分野で頭角を現そうとした十次先生ですが、どの道の中にも「世の中や人の役に立ちたい」という一貫した強い思いがありました。この強い意志があったからこそ、十次先生は夢に向かってがむしゃらに突き進むことができ、誰にも成し得なかった児童福祉を確立できたのでしょう。

十次先生は四十八歳という若さで永眠しましたが、亡くなる間際まで自分の預かっている孤児や、遺していく家族のことを思っていたそうです。十次先生は、生涯を閉じる最期の時まで、一生を通じて他人のために尽力した人でした。

より鮮明に、そして輝いて見えるようになりました。発表することで、本当に叶えたいという強い気持ちになったからだと思います。十次先生も医者になる夢をもった時、その夢に向かって突き進みたかったと思います。孤児を救うためにその夢を諦めたことは、とても悲しいことだったでしょう。医者になることも、孤児を救うことも、「人を救う」ということには変わりませんが、孤児を救うことの方が先の方がとても困難なような気がします。今の時代よりもずっと不便で貧しい生活だったのにもかかわらず、自分のことよりも他の人を助けるために生きていく決心をしたことは、私の心の中に強く焼きつけられました。

これから、自分の将来の夢に向かって進む時、大きな壁が立ちほだかり、自分の夢が叶わないことがあるかもしれません。そのような時は、すぐに諦めるのではなく、思いやりの心や強い信念で乗り越えていきたいと思えます。そして、このような決心をさせてくれた十次先生を心から尊敬していきたいです。

しかし、それは本当に快適といえるのでしょうか。たとえば、スマートフォンさえあれば、私たちは一瞬で知りたい情報を何の努力も無しに手に入れることができます。しかし、その代償として、私たちは努力の素晴らしさも、苦労して結果を掴み取った時の達成感も手放しているのではないのでしょうか。私は、驚きも感動もない漠然とした日々を過ごしている気がしてなりません。そうやっていたずらに日々を重ねた人生に意味はあるのでしょうか。「信じて疑ふことなかれ。祈りて倦むことなかれ。為せよ、屈するなかれ。時重なればその事必ず為らん。」

これは十次先生が遺した言葉です。一度きりの人生を懸命に生きた十次先生の姿がそこにあります。十次先生のように偉大なことはなかなかできるものではありません。しかし、この言葉のように、自分の目指す未来を信じ、惜しみない努力をすることはできます。そして、その努力の先に叶う夢がある人生とは、どれほど素晴らしいものでしょうか。

十次先生の言葉から学んだこと

高鍋高校 2年 友草はるの



「孤児のため 命を捨てて働かん 永の眠りの床につくまで」
これは、十次先生が岡山市の三友寺で孤児教育会を始めた当時の日記に書いた言葉です。この言葉を初めて目にした時、赤の他人のためにそう断言できることに衝撃を受けました。また、そう思う一方で、命を懸けてでも成し遂げたいことがあった十次先生を羨ましいとも思いました。そして、十次先生はどのような境地にたどり着いたのだろうか疑問に思ったのです。

十次先生の生涯を知れば知るほど、十次先生は様々な苦難や挫折を味わっていることが分かりました。十次先生は幼い頃、海軍士官になることを夢見ていたそうです。しかし、脚気を患い、志し半ばでその夢を断念しました。その後、新たに医師の道を歩み始めますが、英国の孤児院長のジョージ・ミューラー

味のあるものにしていききたいです。

意見発表

意見発表 (英語スピーチ)

The life of Ishii Juji

Takanabe Nishi J.H.S.
Oba Nanami

Ishii Juji was born in 1865, in Babanoharu, Takanabe Town, Miyazaki. Juji wanted to be in the navy. So he went to a school in Tokyo called Kogyokusha. But he fell ill and went back to his village. He did a lot of different jobs but he could not find one that made him happy.

When he was eighteen years old, Juji started studying to become a doctor in Okayama. During the summer holidays, he went back to his hometown and ran a school called Babano-haru-asaban school. During the day, Juji worked with the young villagers in the fields and at night they studied together. All the villagers liked Juji a lot.

One day Juji found a poorly dressed boy and a girl at the temple. They looked up at Juji in fear. Juji gave them riceballs and they ate them quickly. That night their mother was also at the temple. She said to Juji, "We are very poor and have no place to stay and no family to help us. People throw stones at us and make us go away. We can't keep on living this way. Please take care of this boy." Juji went home. He wanted to help the family. "Shinako, can't we do something for them?" Juji asked his wife. She said kindly, "Just one boy would not be so bad!" They took in the boy named Sadaichi. More and more people heard about this and Juji was asked to look after many children. Later he set up an association for them.

I'm proud of Ishii Juji, because he is a great person who came from my town. He is one of the men who helped make the Japanese welfare system. Today, we can still see the kind face of Juji's statue. The people of Takanabe will never forget him.

石井十次は、1865年宮崎県高鍋町馬場原で生まれました。十次は海軍士官になりたいと思っていました。それで東京にある攻玉舎という学校に入りました。しかし彼は病気になり自分の故郷の村へ帰りました。彼はたくさんの違った仕事をしましたが、彼が幸せになれる仕事には就くことができませんでした。

18歳のとき、岡山で医者になるために勉強を始めました。夏休みの間に、彼は故郷に戻り、「馬場原朝晩学校」という学校を設立しました。十次は、日中は若い者たちと田畑へ行き、働きました。夜は彼らと共に勉学に励みました。十次は村の全ての人に大変愛されました。

ある日、十次は寺にぼろをまとった男の子と女の子を見つけました。二人は恐れながら十次を見上げました。十次は彼らにおにぎりあげると、二人はすぐに食べました。その夜、彼らの母親も寺にいました。彼女は十次に言いました。「私たちはとても貧しくて住む場所もなく、助けてくれる家族もいません。人々は私たちに石を投げて、私たちを追い払うのです。このような状態では生きていけません。どうか男の子だけでも世話をしてくれませんか。」十次は家に帰り、その家族を助けたいと思いました。「品子、彼らのために私たちに何かできないものだろうか。」十次は妻の品子にたずねました。彼女はやさしく言いました。「男の子だけならなんとかありますよ。」二人は定一という男の子を引き取りました。人々がこのことを聞いて、十次はたくさんの子どもたちを預かってほしいと頼まれました。後に彼は子どもたちのための施設を設立したのです。

私は、石井十次を誇りに思います。なぜなら偉大な人物が自分の町の出身であるからです。彼は日本の福祉の道を開いた偉人の一人です。今日でも、私たちは十次の銅像のやさしいお顔を見ることができます。高鍋の人々は彼をいつまでも忘れないでしょう。

高鍋西中学校
3年
大場七星

石井十次先生の生涯



The Great Person~Ishii Juji

Takanabe-Higashi J.H.S
Takeuchi Kazui

When he was six or seven years of age, Juji was dressed by his mother in a new kimono with a fine belt for the harvest festival. "Now you look handsome! Why don't you go outside and play?" said his mother. Juji ran over to the shrine, his heart beating with joy. A small boy was sobbing near the gate of the shrine "What's wrong, Matsukichi?" Juji asked. But he guessed from the way Matsukichi was dressed humbly in a torn kimono with a rope for a belt, that he was being snubbed by his friends. "Stop crying, Matsukichi, I'll give you my belt," said Juji, taking off his belt for Matsukichi. Then he led Matsukichi over to his friends, to join them and play.

In the evening, Juji went home only to be asked by his mother what had become of his belt. Juji told her the truth honestly, though he feared that he might be scolded for what he had done. But his mother gave him a gentle smile, and said. "Is that right? Good for you. Matsukichi must have been happy." His mother's response inspired Juji to begin his volunteer work.

This is the well know story about Ishii Juji. As you know, hi is one of the greatest people from Takanabe. I have often been taught Mr. Ishii's teachings since my childhood. Now I respect him and I'm very proud of him.

There are words Mr.Ishii left: 信- To believe in each other, 愛- To love each other, 和- To live together in harmony'. I always keep them in mind, and I try to do my best to be useful person for society.

石井十次が小学校に入学するころ、十次は秋祭りに素敵な帯に新調した着物を母に着せられていました。「さあ、これできれいになったわ。外で遊んでらっしゃい」と母が言いました。十次は胸をはずませて天神さまに行きました。すると、一人の男の子が鳥居の近くで泣きじゃくっていました。「どうしたんだい? 松吉。」十次が尋ねました。しかし、十次は松吉が縄の帯にみすばらしい着物を着ているので、みんなにのけものにされていることがわかりました。「泣くんじゃないよ、松吉。ぼくの帯をあげるから。」十次は自分と松吉の帯を取り替えました。その後、松吉を連れて行ってみんなと遊びました。

夕方、家に帰ると十次は母に彼のしている帯について尋ねられました。十次はおそるおそる正直にわけを話しました。母は優しく微笑みかけながら「そうなの? それは良かったわ。松吉は喜んだに違いないわね。」と言いました。十次の母のことは彼が奉仕の仕事につくきっかけになりました。

これは石井十次がよく知られている話です。ご存じの通り、彼は高鍋町出身の偉大な先人たちの一人です。私は石井十次の教えについて子供の頃から教えられてきました。そのおかげで私は石井十次を尊敬し誇りに思っています。

石井先生の残した言葉があります。信—お互いを信じること。愛—お互いを愛すること。和—協調しながら共に生きること。このことばを私はいつも心にとめ、社会に役立つ人間になろうと努力しています。

高鍋東中学校
3年
竹内一偉

偉大なる石井十次



「石井十次なわのおび賞」を制定しました。

石井十次顕彰会では昨年、石井十次の精神や生き方を高鍋町の子どもたちに継承してもらおうと「石井十次なわのおび賞」を制定しました。

これは善行やスポーツ、芸術などで感動を与えるような活動、業績を残した町内の小中学校生を対象に贈るもので、第1回の推薦を昨年12月に締め切り、今年の2月に発表。4月の生誕記念式典で石井十次賞とともに表彰します。

ご報告

このたび、みなさま方より多額のご寄付をいただきました。

ここに厚く御礼申し上げますとともに、
謹んでご芳名を記させていただきます。

(平成26年2月1日～平成27年12月31日)

篤志寄付

高鍋町 有限会社事務機のフクモト様

高鍋町 立正佼成会 高鍋教会様

高鍋町 株式会社高鍋衛生公社様

高鍋町 松尾正博様

高鍋町 株式会社黒木本店様

高鍋町 株式会社増田工務店様

忌明寄付

高鍋町 脇岡 明様

宮崎市 大山 俊郎様

高鍋町 矢野 正子様

編集後記

「顕彰会だより」第24号をお届けいたしました。

今冬は例年になく暖かい日が続いておりますが、みなさまお変わりなくお過ごしでしょうか。

石井十次賞を受賞された長谷場夏雄さんは現在八六歳。当会では昨年、東京都足立区にある青少年福祉センターをお訪ねし、ご本人を取材させていただきました。やや耳が遠くなっておりましたがとてもお元気で、素晴らしい笑顔でご対応いただき、逆に元気をもらった思いがしました。また、立派な施設の数々に感心し、これまでのご苦勞を察した次第です。さて、当会では「石井十次なわのおび賞」を新しく制定しました。こちらにもご注目いただければ幸いです。季節はめぐり、春も間近です。みなさま方のますますのご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。

公益財団法人 石井十次顕彰会

〒884-0006

児湯郡高鍋町大字上江81-13番地

☎0983312314312

レポート

第25回石井十次顕彰のつどい

児童の熱演に「ブラボー!!」



第25回「石井十次顕彰のつどい」を、河野俊嗣・宮崎県知事（出席は代理）、佐藤勇夫・県社会福祉協議会会長（出席は代理）、小澤浩一・高鍋町町長を来賓に迎え、昨年11月8日、高鍋町中央公民館ホールでおこないました。

石井十次を歌う会による美しいコーラスで幕を開けた舞台では、高鍋西小学校児童が合唱や合奏を披露。クイズ形式で石井十次の功

績を紹介しました。

毎年、演し物が変わる児童劇は、縄の帯を締めていたためにかかわれていた少年を見かね、自分の真新しい帯と交換したエピソードを演劇化した「縄の帯」を熱演。全出演児童が最後に挨拶したカーテンコールでは客席から「ブラボー」の声がかかり、会場中から惜しみない拍手が送られていました。

